平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦 Ⅳ

平和の礎

海外引揚者が語り継ぐ労苦

Ⅳ

平和の礎
海外引揚者が語り継ぐ労苦 Ⅳ

平成六年三月三十日　印刷
平成六年三月三十日　発行

編集　東京都文京区大塚五丁目三番十三号
発行　平和祈念事業特別基金
印刷　新日本法規出版株式会社

まえがき

平和祈念事業特別基金は、今次大戦における尊い戦争犠牲を銘記し、かつ永遠の平和を祈念するため、関係者の労苦について国民の理解を深めること等により、関係者に対し慰藉(しゃ)の念を示す事業を行うことを目的として「平和祈念事業特別基金等に関する法律」に基づいて設立された。

基金法には、この目的を達成するために行うべき各種の業務が定められているが、この「平和の礎――海外引揚者が語り継ぐ労苦――」の作成は、その中の関係者の労苦に関する調査研究並びに関係者の労苦に関し、出版物を作成し及び頒布する業務に係るものである。

この業務の実施に当たり、基金は、平成元年度から社団法人引揚者団体全国連合会に、主として次の三つの観点から引揚体験者の手記の執筆等の方法により、労苦の実態を明らかにすることをねらいとして調査研究を委託してきた。

(一) 海外居住の動機と家族状況
(二) 終戦直前・直後の生活の変化
(三) 引揚及び生活安定までの労苦

特に平成四年度の委託に当たっては、より掘り下げた実態の描写をねらいとして、長編の労苦記録の作成に努めるとともに、記録者の戦前・戦後の動静などについて、連合会等で聞き取り調査を行い、その成果を「執筆者の横顔」として付し、労苦の多角的把握に資することとした。

連合会では、基金からの委託に基づき、全国的に広範囲にわたり活発な調査研究活動を展開し、関係者から

数多くの手記等を収集し整理の上、「引揚者労苦体験記録」として基金に報告がなされた。

報告された労苦記録の各編々には、旧満州を始めとして海外居住者の引揚げにまつわる数々の労苦がつづられており、過酷な状況の中で生死の境をさまよいながらの引揚げ、引揚げ後の生活再建の過程での艱難辛苦といった労苦の実態が、簡潔であるが往時を想起させるに十分な迫真の筆致で生々しく描かれている。

本書は、体験者にして初めて明らかにされる具体的な労苦の記録であるので、戦争の残虐さ、残酷さ、悲惨さ、その上いかに無意味なものであるか、翻って、平和がいかに尊いものであり、大切なものであるかを教えてくれるこの上なく貴重なものである。したがって、彼らの労苦を徒労に終わらせないためにも、この労苦を子々孫々に語り継いでいくことが必要であり、そのためにも、この書は永く保存され周知されるべきものと思料する。

最後に、調査に当たられた連合会関係者のご努力と寄稿された多くの方々のご協力に感謝するとともに、本書が平和祈念の書としてたくさんの人に読まれ、平和の一助となることを願うものである。

平成六年三月

平和祈念事業特別基金
理事長　勝又博明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海外引揚者が語り継ぐ労苦 Ⅳ

目次

まえがき　勝又　博明

〔満　州〕
満州に渡り・引き揚げるまで　結城吉之助　1
龍爪をあとにしての記　羽柴芳太郎　20
満州国竜江省甘南県太平山村三合屯　瀧川　辰雄　40
三合東三河郷開拓団顚末記
「父さんはとうとう帰って来ませんでした」　江頭ふみ子　70
満州での逃避行（子どもの霊に捧ぐ）　中村　久尚　88
集団自決で生き残った七人の小学生　岩崎　スミ　101
引き揚げ後の労苦　吉田　久子　126
引き揚げ者体験記　飯田　忠雄　144
渡満から引き揚げ後の労苦　久木　孝作　156
和良村分村開拓団・苦渋の道　玉田　澄子　169
渡満、召集、敗戦、引き揚げまでの苦難　神田　雅夫　191
満州聚和義勇開拓団の惨状　米司　好美　205
引揚者労苦　本間　佐市　217
大陸に生まれ、大陸に育った「或る男の生涯」　川村　一正　230
引き揚げ体験記　渡辺　貞二　252
戦後モンゴルに抑留されて　阿部　宥藏　269
私が辿った道　山崎　勇作　283

〔樺　太〕
シベリア抑留体験記　佐々木彌作　306

〔朝　鮮〕
ソ連の占領下、北鮮での体験記　江原　直己　320
裸で得た第二の人生　山岸　猛男　334

〔中　国〕
中国はわが心の古里　中村祐太郎　353
引揚者労苦記　中山　隆　378
南洋、台湾、蒙彊、残照

〔台　湾〕
台湾引き揚げの記　中村　信子　403
闘病・終戦・留用・台湾を引き揚げるの記　牧野　清　416
〔その他〕
戦時中ルソン島の在留邦人の記　宍戸　善作　441
あとがき

満　州

満州に渡り・引き揚げるまで

山形県　結　城　吉之助

昭和六年

大学在学中の九月、満州の関東軍と軍閥張学良軍が戦争しあって、張軍が敗走したあとに満州国が誕生した。

昭和七年

五・一五事件が勃発し、話せばわかる、と言ったが撃たれた犬養首相の方が英雄的で、撃った青年将校は無茶で非武士道であったと思った。

私は、夏休みに農村の実状視察に出かけた。

往きは徒歩、帰途は国鉄列車である。

七月二十四、二十五日　東京青山三丁目～埼玉県～栃木県鬼怒川温泉

七月二十六、二十七日　鬼怒川温泉～福島県田島町～梢沢村～高野村～昭和村

七月二十八日　昭和村～玉梨村～川口村

七月二十九日　川口村～西方村～沼沢村～柳津村

七月三十日　柳津村～郡山町～東京青山三丁目

以上、農村の実態の説明を聴き乍ら視察し、特に各個々の農家の収支、生活内容、教育、現在の希望、将来の希望など、とりまとめた。素朴で率直な地方の話題の裏、話題に内包されている真実に何かがある、それは何か。

人間生きてゆくために、法律にふれなければ何やっ

てもかまわない、というだけの考えでもない。
生きるためには道徳、良心に従って社会秩序を守らねばならない、というだけの考えでもない。
とにかく、東北の一隅たる農村の実態にふれて、このまま放置すれば大きな社会問題が惹起するという予感を私は抱いた。
東洋より、西洋に学び、西洋においつき、おいこせで驀進している日本は唯物万能社会が生んだ経済の利害のくらしが常識化している。何とかこの混濁逆巻く日本を正道にもどしたい。
しかし、正道にもどすには余りにも犠牲が大きい。
どこか新しい社会をつくる天地がないかと暗夜に光明を探し求めていた。
これが、当時の日本、とくに農村の青壮年の悲鳴に似たる真実の叫びであった。
この現実を深く見聞した私は一身を抛って清新な日本社会の改造に奔走するか、それとも日本の生命線と言っている満蒙大陸に現地人と協力しあって理想社会の建設に当るか、大海に浮ぶ一粒の粟に似たる学生の分際で青二才の私は真剣に考えをめぐらしていた。
昭和八年
折しも、満蒙開拓の指導者養成、満州鏡泊学園創設の記事が、あらゆる新聞に発表された。
私は、長いトンネルを潜り抜け、しばらくぶりで青空をながめたような感じをうけた。
少年時代から大陸志向だった私は、身元保証人の松岡俊三代議士にご相談申し上げたところ、大賛成され、これは餞別と言われ、三百円の入学金を出してくれた。当時の三百円は大金であった。
某日、学園創設者、山田悌一氏、柴田徳次郎舘長の両氏と国士舘で面談した。主として山田氏から学園の構想を聴取し、初対面で山田氏の思想と容貌に魅せられ、入学願いを申し上げたところ、早速口頭で入学の許可をうけた。
帰宅途中、渋谷の松涛町、頭山満翁を訪ね、満州鏡泊学園入りの決意を報告した。翁は喜悦満面して忠孝一本の軸物を授与してくれた。
その後、時を得て山形の故里に帰り、両親兄弟、友

人に渡満の決意を伝えたところ、皆喜んでくれた。
工藤伊惣治村長は小学校講堂に青年団と婦女会の方々を集め、私の渡満挨拶の講演会を開催してくれた。故里は有難きかなと、しみじみと感じた。
日本は八千万人の人口で、満ち溢れて失業者が増加の一途をたどっている。土地も山頂まで耕し、農家の二、三男はゆくところがない。
アメリカは排日、ブラジルは遠すぎる。一衣帯水の海の向こうに満州がある。
私は以上のような簡単な理由で渡満するのではない。
故里の母校の忠魂碑にみられるように、日清、日露の大戦で十万人余の日本兵士の血が満州の大地に流されている。血で得た権益こそ、日本民族の生命線として守る義務がある。
また、張学良の軍閥政権は満州農民に対する圧政を強いていた。この圧政から救わねばならない。それには、満州に早くから先住している漢民族に対し、日本農民が参加して満州の未開発地域を開拓、開発へ発展することは、新しい満州国の使命である。
さかのぼれば、東三省、つまり満州は中国本土とは異なる民族の土地であり、中国古代史には、いわゆる塞外の異民族の地であった。
山海関から遠く長く築いた万里の長城は、それを如実に示している。
新しい国、満州は日本、漢民族、満州族、朝鮮族、蒙古族、の五族の民族協和して国威を顕現して自由な民主主義文化国家を築くことは、日本と満州だけでなく、世界各国に、これからの国家構造は斯くあるべきだ、との模範を顕示することが、われ自らの使命であると結論づけていた。

満州鏡泊学園

学園の創設者は山田悌一氏である。山田氏は九州都城、由緒ある勤皇家の山田家、東洋協会専門学校（のちの拓大）を卒業、蒙古独立運動を支援に川島芳子らと活躍した人、のち柴田徳次郎氏を助けて国士舘創設に尽力された。
山田氏は、東亜百年の大計は、中国人と協力調和の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

できる人材養成こそ、基本的急務であるとし、満州における壮大な私学の開校を目指した。

昭和七年、自ら調査して白羽の矢を立てたのが、山紫水明の鏡泊湖、湖畔である。

昭和八年一月、満州国文教部第一号で認可された。四月には第一期生二百人が入学した。東京での教育は国士舘高等拓殖学校に委託生として、全員高拓宿舎に起居し、校長は小泉六一陸軍中将、開校にあたり、徳富蘇峰翁は「男児四方の志」との一文を書かれて祝辞をのべる、駒井徳三満州国総務庁長官の講演などで感激した。

国士舘高拓の委託学生教育四か月を終え、昭和八年八月一日、満州鏡泊学園二百人の学生は渡満の壮途に東京駅から立った。

焼けるような熱い日である。荒木貞夫陸軍大臣、永井柳太郎拓務大臣の訓示は全学生を鼓舞した。

神戸港からハルピン丸で大連に上陸、国都新京に着いて国務院で鄭孝胥総理大臣の風貌に接して挨拶をうけた。

八月十一日、敦化県城に到着、東部満州のこの地で自給生活の作業訓練をしながら越冬した。

昭和九年

この年の三月一日で満州国は満州帝国となり、大同から康徳に変り、いたるところ祝賀された。

三月上旬から中旬にかけて敦化の宿舎から全員馬車隊で二泊三日かかって鏡泊湖の湖畔に辿りつき、農家を十戸ほど買収したあとに分屯した。

宿舎周囲の鉄条網張り、温床つくり、水田用地と水路の測量など昼は農耕、夜は警備、降雨の日は読書という生活に入った。

鏡泊湖一帯を外界から隔てている山脈は西に張広才嶺、南に哈尓巴嶺、東にも老爺嶺、北方だけが牡丹江の流れに沿うて東京城平野が開けている。

この山嶺は原始林で雉子、ノロ、虎、鹿、豹の生息地、木耳（きくらげ）、にんじん、煙草、蜂蜜などとれる湖に珍重フジという鮒がとれる、正に桃源郷であり、また、反満抗日の匪賊の巣窟でもある。

四月某日、朝礼の場で、山田悌一総務から、結城、

水上七雄、松下俊雄の三人を第二期生指導員に任命した、東京の日本青年会館に待機している二期生を引率のため日本へ行くことになった。

現地の情況を気にしながら、三人は敦化、清津、敦賀を経て東京の青年会館に入った。

四十四人の二期生を引率して、再び神戸港から大連に上陸、学園の新京事務所に到着したのが五月十七日である。

そこで一通の電報を受けとった。「山田総務一行十五人大廟嶺で戦死した」との凶報である。私にとって天地が覆り、全身の力が抜けてゆく感じである。

更に詳報によれば、寧安県に出張の帰途、山田総務の一行は大廟嶺で匪賊の待ち伏せを受けて、全員戦死を遂げたのである。一行は山田総務、今井和佐久幹事、樹下清指導員、任茂林通訳、学生の武田六蔵、菅原寅夫、亀沢貞雄、後藤宇三郎、室田隼夫の五人、守備隊の椎名伍長以下五人で合計十五人である。

大廟嶺の峠に差しかかる道路面に、落し穴をつくって、自動車の前車輪が墮ちるのを待って、匪賊は両側の稜線から一斉に狙撃したのである。

かくて、一行は大廟嶺の林の中の路上で、四十二歳の山田総務は若い学生とともに命を散らした。

この詳報をきくもの皆、恩師山田先生、同志の面々を思い胸中に去来する涙！悲風惨たるかな、大廟嶺

私ども三人は、只管（ひたすら）に二期生を無事学園まで引率の大役を果たすべく、二期生を励ましあい、新京滞在中、学園名誉総長、田辺熊七国務院参議を訪ねて挨拶をうけた二期生は責任の重要性を感じてくれたと思った。

六月五日　敦化から鏡泊湖に向かった。池田馬車隊と岩見伍長以下十一人の日本軍に護られて二期生四十四人の行軍は、降りつづく雨の中にも夜営を繰りかえし、ぬかるみに阻まれ、九日、午後ソーチオミという窪地で匪賊の待ち伏せ襲撃に遭い、きわめて少ない兵力にも拘らず岩見伍長以下日本兵は勇猛果敢に防戦し、衆寡敵し難い激戦中においても、学生等を戦闘に参加せしめず、只、岩見伍長から私ども三人の指導員に、学園本部へ通報に赴くことの依頼をうけた。

私は、水上、松下の両氏に二期生の行動を頼み、敵

の弾丸、弾雨の危険を冒し飛鳥の早技のごとく走った。死は止む得ない覚悟である。

学園の陸軍中佐、小池司令は匪賊襲撃の情報を得て、学園軍を率いて途中まで救援にきていたのと私は出遭った。「ソーチオミで激戦中」と伝え、小池司令を案内して激戦地にもどったが、匪賊を完全に撃退せしめ、四十四人の学生は全員無事であったことが何よりも感激した。

しかし、日本軍の力戦奮闘も遂に岩見伍長以下五勇士の戦死をみるに至ったのは忘れることのできない守護神である。

敦化出発以来十一日目の六月十五日、ようやく学園へ到着した。

二期生四十四人は渡満早々敦化を出発して以来匪賊の襲撃をうけること五回に及び、もっとも激烈をきわめたのはソーチオミの襲撃であり、学園の宿舎に到着したところ、千五百人の匪賊が学園を包囲しているさ中にあって惨憺たる環境である。二期生四十四人が夢にみた学園と、その現実とは恐ろしい隔たりがあることを感じたのである。しかもアミーバ赤痢にやられたものが続出した。

更に、また八月十六日に、陸軍少尉学園の上杉虎寿学監指揮の下に学生十人が物資輸送のため東京城へ赴き、八月十九日、馬車隊を護衛して帰園の途次、午後二時頃大廟嶺の密林にさしかかった際、匪賊に狙撃され、学園軍は直ちに応戦して撃退したが、学生小野田正三氏は胸部に貫通銃創をうけ、学生同志に見守られつつ遂に死亡した。

ああ！大廟嶺！山田総務等一行十四人を、ここで失い、今また、この殉難である。魔の大廟嶺、匪賊に痛めつけられた、こうした事変、それは筆舌に尽きせぬ惨憺たるものであった。

私は、こうした不幸の度毎に、数珠を携えて浄土宗の正信掲と阿弥陀経を読経し、在家の坊さんによって懇ろに葬式を執り行った。

学園でわれわれの食いものは包米、豆、それに僅かの米を混入したものが主食、蔬菜は欠乏したので野草を食うこととした。この結果は消化不良を起しアミー

バ赤痢患者になり、全員の四分の三ほどが罹(か)ってしまった。

只、困ったことに、はるばる日本から学園に来たばかりの二期生の多くが、アミーバ赤痢に罹ってしまった。六、七、八月の三か月の間に蔓延し、勿論作業はできない。部屋にごろごろ転げこんで見るも哀れな有様である。血便がでる、唸る、叫ぶ、患者を看護してくれるものは、たった一人の園医、田中宇七軍医中尉がいるのみ、しかも田中園医もアミーバ患者であった。

私は、幸いに頑健だったから部屋中を駆けめぐっていたが、患者でホームシックにかかっている若者の魂をゆり動かして生きる希望を与えることの如何に至難であるか、をしみじみと感じた。

八月末、学園生の中から六十余人の徴兵検査のため、新京に赴かなければならなかった。

しかし、絶海の孤島化した学園から新京に行けない。それは悪路のところを病体の学生の多いことと、途中匪賊の蠢動(しゅんどう)はげしい時である。これらを理由に、猶予方無電で交渉した結果、関東軍から許可された。

その頃、匪賊は益々跳梁(ちょうりょう)し出した。対岸の山には匪賊の群がる姿さえ見られた。

学園生は病める身体を、疲れた身体を望楼に、塹壕に立って見張るのである。それも昼夜を分かたぬ張番である。それでも誰も不平を言うものがいない。言ってはおれない。不平と言うものは余裕のあるときにでる愚痴であることを、この時ほど強く感じたことはない。

それに学園のわれわれを恩師の山田先生の御霊が護っていてくれる。われわれは恩師盟友の死を無意味にしてはならぬといった思いやりの心で、こうした緊張がつづいたのであろう。一人の脱落者もなく、不平も言わず、耕作と警備につとめた。このようにして昭和九年は苦難につぐ苦難のうちに終わった。

昭和十年

明けて新年早々から学園は資金難、食糧難で窮地に陥ってしまった。

やがて春酣(たけなわ)となるや、湖畔は無心に百花繚乱として咲きほこる。夕暮れに学生は鈴蘭、百合、ねじ、あ

やめなどを摘みとって御霊ケ岡の恩師、盟友の墓詣でをするのである。

しかし、物資は欠乏に次ぐ欠乏である。相変わらず、包米、高粱、粟の混食、小麦粉は湯団子にして食べた。塩分のない食事はほんとうに困った。栄養不良の結果は、夜盲症が続出した。夜に外出はできない。石油が絶えてしまったので幾夜も燈のない夜をおくった。そうした夜は原始生活のように皿に豆油を燈した。

こうした生活に耐え忍んだ。世の悪罵と嘲笑に報いようと思ったものである。

私は、夜外に出て、「憂きことの、なおこの上につもれなし　限りある身の　力ためさん」「われに七難八苦を与え給へ」と若武者山中鹿之助の三日月に向かって唱えた文句を、こよなく愛して朗詠し、自らを鼓舞した。私の側に影の如く付き添って協力してくれた合田義一君（北海道出身）も合詠していた。

この六月、徴兵検査の猶予は、これ以上できぬとあって、牡丹江兵事部目指して七十余人が行軍で出発。途中大廟嶺で恩師、盟友戦死の跡に花束をささげて手向け、皆は長い黙禱がつづいた。

私は、この検査で甲種合格、陸軍歩兵第七四連隊に入営を命ぜられた。

苦難の学園は如何になるのか、解散か、定着かの岐路に逢着した。

七月三日、大林一之総務が、はるばる東京から、この鏡泊湖に来られた。そして関東軍と折衝の結果、左記の如く学園生に示したのである。

一、大林総務は責任を負うて辞任、古幡景美幹事が現地代表として一切の処理に任ず。

二、学園の問題解決迄は関東軍が経営す。

三、応急の食糧費として、拓務省補助一万円を以って食い繋ぐこと。

四、学園負債十万円は学園財産を処分し、近く実現する移民会社をして買収せしむ。

五、学生は希望により、拓務省第四次の基幹移民として入植せしめる。また一般移民の農事指導員とする。

大林一之総務は声涙ともに下る。訣別の辞をのべて、学園の運命を悲しんで帰京したのである。

私は入営のため、昭和十年十一月二十一日最初にして最後の学園卒業式には出席できなかったが、とにかく、卒業式を終えて全学生は悲壮な決意を胸に四方に散じたのである。

大林総務の話をうけた学園生はそれぞれ己れの道を選ぶ集団が自然に形に現われた。

大勢は御霊ケ岡の恩師、盟友の御霊をまもり、この地で原住民とともに、栄ある民族協和の理想郷をつくる、という決意のもの多く、つまり学園村づくりの哲学を唱える高椋幹樹君の意見に傾いていた。

私は、第四次拓務省移民団の基幹になる決意で、水上七雄、藤沢寅三の両君に相談し全員に呼びかけて希望者を募ったところ、六十余人いたが、段々減って四十四人になった。

関東軍に提出文書を水上七雄君に文案作りを頼み名簿を添えて、古幡幹事に提示したところ、これを早速、関東軍第三課の秋永参謀に、君達代表が持参して説明されたいとの古幡幹事の助言である。

私は、藤沢寅三君を連れて、鏡泊湖から新京の関東軍を訪問した。

秋永参謀外、ほかの参謀からも懇切な説明をきき、我々の願意が達したのである。

新京滞在一週間は、興農部参事官井上義人氏（古賀新作指導員と九大同窓の方）に古賀指導員の紹介状持参したので、井上ご家族に大変お世話になったことは忘れられない。

右のことなど学園に帰って報告した。基幹移民行の四十四人は一応安心し落ちついて、その準備にとりかかった。

しかし、私は徴兵にあい、後ろ髪を引かれる思いで学園を去って、一路帰国したのである。昭和十年十月某日二十五歳であった。

在満三年間、死一歩手前の生活をくぐり抜けて、祖国の故里に帰った。国民の義務である徴兵として入営するためなのである。満州での惨憺たる苦労した話など、歯を食いしばって、言葉のはしにも出さず、莞爾（かんじ）として故里の人々に再会の喜びだけをのべた、意地っ張りの帰郷であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com